



1. 気仙沼ならではのイベント「造船所探検」。小雨が降る中、10人の親子連れが集まつた。2「漁師体験」のプログラムを主催する横岸えまさん（中央）。本人は漁師の生き方に魅了されて気仙沼への移住を決意した。3. 製氷工場を案内する「氷屋探検」。4. 唐桑リバーサイドクリニックで宝探しに夢中になる子どもたち。5. 気仙沼の観光振興を支える若者たち。後方は唐桑のツリーハウス

撮影：尾崎文葉

シティア活動だった。そこで出会ったのが、メカジキ漁の漁師 佐々木夫一さんだ。ある日、ボランティア仲間と佐々木さんの自宅に夕飯に招かれ、「命と引き替える仕事の大変さ、復興への使命感を聞かされ、衝撃を受けた」（根岸さん）。

その佐々木さんに漁業体験ツアーへの協力を求めたところ、「俺で役に立つなら協力してもらいたいよ」と思ひがけない返事をもらった。佐々木さんの参加をきっかけに協

力者が増加。今年8月の、漁師が水揚げしたホタテを観光客自ら調理して食べるツアーも好評を博した。

スイス視察を経て DMO組織の設立へ

よそ者による新たな取り組みは、市内の観光事業者にも刺激を与えていた。市内最大の宿泊施設、気仙沼アラベラホテルの堀田文明支配人は、「今まで水産業は水産業、観光は観光で、

1. 気仙沼ならではのイベント「造船所探検」。小雨が降る中、10人の親子連れが集まつた。2「漁師体験」のプログラムを主催する横岸えまさん（中央）。本人は漁師の生き方に魅了されて気仙沼への移住を決意した。3. 製氷工場を案内する「氷屋探検」。4. 唐桑リバーサイドクリニックで宝探しに夢中になる子どもたち。5. 気仙沼の観光振興を支える若者たち。後方は唐桑のツリーハウス

撮影：尾崎文葉

協力し合うことはほとんどなかつた」と語る。だが、自らも観光チラム気仙沼の活動に積極的にかかわる中で、「異業種の人たちとのつながりを通じ、お互いに協力し合うことの重要性を強く認識した」。

観光振興に不可欠なのが、食のブランド化だ。ここでは気仙沼の家庭でごく普通に食されているメカジキを多くの人に味わってもらうことを目標に設定。メカジキのしゃぶしゃぶをメニューに載せたのが、市内ですし店を経営する鈴木真和さん（43）。『食を通じて観光振興に貢献したい』と意気込む。

取り組みを続ける中で、克服すべき課題もはつきりと見えてきた。

今年3月、商工会議所の菅原会頭や森さん、廣野さんら10人のメンバーは、スイスの有名な観光地・ツェルマットの取り組みを視察した。

「そこで観光で生きていく街の徹底ぶりとともに、DMOの重要性を強く認識した」（菅原会頭）。

DMOとは観光地作りの舵取り役で、市場調査から観光商品の企画までを総合的に手掛ける戦略組織だ。ツエルマットでは地元観光局を中心とするDMOが顧客データベースに基づくマーケティングを徹底して行なうなど、欧米の観光地では重要な役割を担っている。観光庁は日本版DMOを推進して

いるが、気仙沼ではプラットフォームの活動やツエルマット視察などを経て、草の根的にDMO創設の機運が高まつた。8月4日、市長をトップとした「気仙沼観光推進機構（仮称）」とDMOの創設を早急に目指すことが決まった（87頁図）。

大手情報通信企業から出向しプラットフォームの運営に携わる小松志大さん（40）は「ツエルマットから学んだことは多い。気仙沼でも観光消費額、顧客満足度、リピート率などを重要指標に据え、データに基づいた観光マーケティングを確立したい」と意気込む。

気仙沼のDMOはマーケティングや事業モニタリングなどの役割を担うとともに、市観光課や観光協会、商工会議所など観光にかかわるさまざまな組織の取り組みに漏れやタブリがないかにも目配りする。そして、新たに地域全体をカバーする顧客データベースを構築して地元の観光事業者に提供し、営業や販売活動に役立ててもらう方針だ。

未曾有の灾害で地域の基幹産業が傷ついた気仙沼。手探りで始まつた観光振興はDMOという一つの解を見いだしたが、挑戦はまだ始まつばかりだ。よそ者、若者、観光事業者、地場企業、行政がこれからいかに協力していくか、そこに気仙沼版DMOの成否はかかる。

伊をテーマに多くの美術作品を手掛けたが、震災をきっかけに地域での活動により積極的にかかわるようになった。「ツリーハウスも『ぱ

ト』として開催された気仙沼市唐桑町鮎立での「唐桑ツリーハウスビックスク」（上写真）には、1週間前に自社が観光にかかわることについても、「会社のPRになるし、地域への社会貢献でもある」と廣野さんは脱いでみようといつ企業が出てくれるおさら大成功失敗があつても、いろいろな人たちが取り組みを続けていることが重要だと思つ」

自社が観光にかかわることについても、「会社のPRになるし、地域への社会貢献でもある」と廣野さんは、「おさら大成功失敗があつても、いろいろな人たちが取り組みを続けていることが重要だと思つ」

「観光で来た方に、気仙沼で面白そなことをやつていてるな感じで、もういいと思つていい。観光の振興に肌脱いでみようといつ企業が出てくれるおさら大成功失敗があつても、いろいろな人たちが取り組みを続けていることが重要だと思つ」

「観光で来た方に、気仙沼で面白そなことをやつていてるな感じで、もういいと思つていい。観光の振興に肌脱いでみようといつ企業が出てくれるおさら大成功失敗があつても、いろいろな人たちが取り組みを続けていることが重要だと思つ」

もう一人のキーパーソンが、地元出身の美術家、齊藤道有さん（39）。東北ツリーハウス観光協会事務局長として、子どもの頃に読み親しんだ童話に出てくるようなツリーハウスを東北で100棟作ろうと、コピーライターの糸井重里さんと連携し3年前から活動している。役割は「市民の観光意識の醸成」だ。

プラットフォームが主催する市民参加型の親睦組織「ばーばーばー」の場！」（ばーばーばー）は、「どこで発する気仙沼の方言」の中心メンバーとして齊藤さんは活動している。この、通称「ばーばー」は、「どこで漁師になる半日」や「黄金のロマンを巡る鹿折金山トレイル！」などを、参加した人自身が楽しむことを目的とした気仙沼ならではの体験型イベントを数多く開催している。

齊藤さんは地元の高校を卒業した後、仙台の大学で美術を学び、震災の前年に気仙沼に戻ってきた。もども自分のルーツやアイデンティティ

は認識している。

そんな廣野さんは全幅の信頼を寄せている。「廣野さんのような意識の高いキーパーソンが出てきたからこそ、観光チーム気仙沼の取り組みが活性化した」。

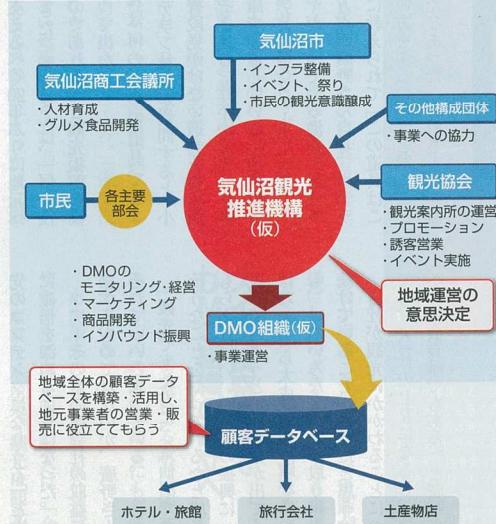
市民の観光意識を醸成

もう一人のキーパーソンが、地元出身の美術家、齊藤道有さん（39）。東北ツリーハウス観光協会事務局長として、子どもの頃に読み親しんだ童話に出てくるようなツリーハウスを東北で100棟作ろうと、コピーライターの糸井重里さんと連携し3年前から活動している。役割は「市民の観光意識の醸成」だ。

プラットフォームが主催する市民参加型の親睦組織「ばーばーばー」の場！」（ばーばーばー）は、「どこで漁師になる半日」や「黄金のロマンを巡る鹿折金山トレイル！」などを、参加した人自身が楽しむことを目的とした気仙沼ならではの体験型イベントを数多く開催している。

齊藤さんは地元の高校を卒業した後、仙台の大学で美術を学び、震災の前年に気仙沼に戻ってきた。もども自分のルーツやアイデンティティ

官民挙げて「観光の気仙沼」を創る —気仙沼版DMOの仕組み—



(出所)アリス観光創造プラットフォームの資料を基に本誌作成



それでも当初は、思いがけぬ逆風に直面する。マーケティングのアイデアをいろいろと提案しても既存の観光事業者の反応は芳しくなかつた。プラットフォーム自体が、既存の観光振興の枠組みを否定する存在だと受け止められたからである。風向きが変わったのは、設立から2年が過ぎたころ。市民参加で観光振興を目指す取り組みに共鳴する、地元の若者たちが現れ始めたのである。創業116年の老舗漁具販売会社「アサヤ」で専務取締役を務める廣野一誠さん(33)もその一人だ。気仙沼出身の廣野さんは都内の大企業を経て大手情報システム企業に勤務。14年12月、震災で痛手を被った

7月中旬の日曜日。小雨交じりの天気にもかかわらず、宮城県気仙沼市内の造船所に、親子連れなど観光客10人が集まつた。『造船所探検』の案内をするのは、市内有数の造船会社・木戸浦造船で検査を担当する男性社員だ。

「皆さん、バルバスバウを知っていますか。(船首にある突起の)バルバスバウでわざと波を作つて水の抵抗を少なめします。そうすると船がスムーズに走れるのです」父親と市内から参加した龟尾裕希

君(12)は「普段見られないの勉強になった」と目を輝かせた。

造船所探検企画したのは、「観光

チーム気仙沼」。

市内の若手経営者や美術家など有志のグループで、街全体で観光を盛り上げよう定期的に会合を開いている。

そこで生まれたアイデアが、「ちょっとぞき」と称した、造船所探検のようないわゆる内観光プログラムだ。この日は造船所探検のほかに、「水屋探検」「海のジエルキャンドルづくり」など七つのイベントに延べ146人

被災した水産業の町で 観光を新たな産業に

が参加し、大にぎわいとなつた。

市は造船所探検のほかに、「水屋探検」「海のジエルキャンドルづくり」など七つのイベントに延べ146人が参加し、大にぎわいとなつた。

創造プラットフォーム(理事長は菅原昭彦・気仙沼商工会議所会頭)以下、プラットフォームを設立した。88名からわかるように気仙沼に宿泊する観光客の数は震災前の水準に戻っていないが、市ではこれを大きく増やしたい考えだ。

設立時からの実働メンバーが森成人さん(40)だ。東京都内的情報サービス大手から経済団体を経由して応援職員として気仙沼市役所に派遣された。着任直後は仮住まいとして提供された仮設住宅から職場に通うなど、地域に密着してきた。

それでも当初は、思いがけぬ逆風に直面する。マーケティングのアイデアをいろいろと提案しても既存の観光事業者の反応は芳しくなかつた。プラットフォーム自体が、既存の観光振興の枠組みを否定する存在だと受け止められたからである。

風向きが変わったのは、設立から2年が過ぎたころ。市民参加で観光振興を目指す取り組みに共鳴する、地元の若者たちが現れ始めたのである。創業116年の老舗漁具販売会社「アサヤ」で専務取締役を務める廣野一誠さん(33)もその一人だ。気仙沼出身の廣野さんは都内の大企業を経て大手情報システム企業に勤務。14年12月、震災で痛手を被った

